

礼拝メッセージフィードバック

＜今日の聖書箇所は…＞

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

セル ガイド

- ①祈り、賛美によって主がここにいてくださることを信じ、聖霊様をさがめます。
- ②互いの存在を感謝し、尊敬するところを分かち合しましょう。
- ③ディボーションの分かち合いをします。
- ④セルの目的と働きについてみなで共有して、祈り、遣わされて行きましょう。

家族礼拝ガイド

年長のクリスチャンがリードしてください。進め方にはいろいろな意見が出るかもしれませんが、「主に期待する」信仰が最も大切です。いつもの家族のでもいいのです。

- ①この1週間で神様はすばらしいと感じたのはどんなこと？
- ②この1週間でお互いにどんなことを感謝しますか？（または誉めたいですか？）1つだけ。
- ③聖書のみことばから、どんな実践をして、またどんな恵みがありましたか？
- ④互いの必要のために祈りましょう。

ディーヴォ ガイド



2022.5.23-29

But **grow** in the grace and knowledge of our Lord and Savior Jesus Christ. To him be glory both now and forever! Amen. II Peter 3:18

L T G ガイド

- ①お互いへの感謝と誉めることを分かち合しましょう。（2～3つ）
- ②1週間の罪を言い表して悔い改め、互いに祈りましょう。
- ③礼拝メッセージの分かち合いをします。
礼拝メッセージの分かち合いが難しい場合はディボーションの分かち合い（なるべく短く）
- ④預言の祈り（主の御心を宣言して祈り）をします。

10:23 すべてのことは、してもよいのです。しかし、すべてのことが有益とはかぎりません。すべてのことは、してもよいのです。しかし、すべてのことが徳を高めるとはかぎりません。

10:24 だれでも、自分の利益を求めないで、他人の利益を心がけなさい。

10:25 市場に売っている肉は、良心の問題として調べ上げることはしないで、どれでも食べなさい。

10:26 地とそれに満ちているものは、主のものだからです。

10:27 もし、あなたがたが信仰のない者に招待されて、行きたいと思うときは、良心の問題として調べ上げることはしないで、自分の前に置かれる物はどれでも食べなさい。

10:28 しかし、もしだれかが、「これは偶像にささげた肉です。」とあなたがたに言うなら、そう知らせた人のために、また良心のために、食べてはいけません。

10:29 私が良心と言うのは、あなたの良心ではなく、ほかの人の良心です。私の自由が、他の人の良心によってさばかれるわけがあるのでしょうか。

10:30 もし、私が神に感謝をささげて食べるなら、私が感謝する物のために、そしられるわけがあるのでしょうか。

10:31 こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい。

10:32 ユダヤ人にも、ギリシヤ人にも、神の教会にも、つまずきを与えないようにしなさい。

10:33 私も、人々が救われるために、自分の利益を求めず、多くの人の利益を求め、どんなことでも、みなの人を喜ばせているのですから。

「自分の利益を求めないで、他人の利益を心がけなさい。」という生き方はクリスチャンの基本です。偶像に関しても同じことが言えます。自分の信仰だけを考えるなら、偶像にささげられたものを食べても、それで害を受けるということはないでしょう。しかし、信仰というものを外面的にとらえる習慣からまだ抜け出せない人は、それが苦になって、不快感や不信感を抱く場合があるということです。人の心を思いやるという観点からも、偶像との関わりは極力気をつけるべきです。

ここでパウロは偶像問題以外にも共通の、黄金律を示します。それは「何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい。」ということです。これはクリスチャンのすべての動機となるべきものです。神に救われて神を愛する者は、「許可されているかどうか」、すなわち「許可されている範囲で、自分の好きなことをしたい」というような、自己目的的な律法主義の生き方をしません。クリスチャンなら誰もが、神様の栄光が表されたらうれしくなります。それを動機として生きるものなのです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



11:1 私がキリストを見ならっているように、あなたがたも私を見ならってください。

11:2 さて、あなたがたは、何かにつけて私を覚え、また、私があなたがたに伝えたものを、伝えられたとおりに堅く守っているの、私はあなたがたをほめたいと思います。

11:3 しかし、あなたがたに次のことを知っていただきたいのです。すべての男のかしらはキリストであり、女のかしらは男であり、キリストのかしらは神です。

11:4 男が、祈りや預言をするとき、頭にかぶり物を着けていたら、自分の頭をはずかしめることになります。

11:5 しかし、女が、祈りや預言をするとき、頭にかぶり物を着けていなかったら、自分の頭をはずかしめることになります。それは髪をそっていろいろと全く同じことだからです。

11:6 女がかぶり物を着けないのなら、髪も切ってしまいなさい。髪を切り、頭をそることが女として恥ずかしいことなら、かぶり物を着けなさい。

11:7 男はかぶり物を着けるべきではありません。男は神の似姿であり、神の栄光の現われだからです。女は男の栄光の現われです。

11:8 なぜなら、男は女をもとにして造られたのではなくて、女が男をもとにして造られたのであり、

11:9 また、男は女のために造られたのではなく、女が男のために造られたのだからです。

11:10 ですから、女は頭に權威のしるしをか

ぶるべきです。それも御使いたちのためにです。

11:11 とはいえ、主にあっては、女は男を離れてあるものではなく、男も女を離れてあるものではありません。

11:12 女が男をもとにして造られたように、同様に、男も女によって生まれるのだからです。しかし、すべては神から発しています。

11:13 あなたがたは自分自身で判断しなさい。女が頭に何もかぶらないで神に祈るのは、ふさわしいことでしょうか。

11:14 自然自体が、あなたがたにこう教えていないでしょうか。男が長い髪をしていたら、それは男として恥ずかしいことであり、11:15 女が長い髪をしていたら、それは女の栄光であるということです。なぜなら、髪はかぶり物として女に与えられているからです。

11:16 たとい、このことに異議を唱えたがる人がいても、私たちにはそのような習慣はないし、神の諸教会にもありません。

偶像の話題の次に教会の混乱についてパウロは問題にします。ひとつは男女の外見についてです。

ここでは、男性のかぶり物、女性のかぶり物、男性の長い髪、女性の長い髪について語られています。もしもそれを普遍的な命令として解釈するなら、「絶えず祈りなさい」と言われている私たちにとって、男性は帽子やヘルメットを被ることは罪であり、女性は常にベールを被っていないと罪になります。またイエス様が長い髪をしていたら、それは「男として恥ずかしい」ということに

なるでしょう。

これは、「私たちにはそのような習慣はない」とパウロが言うように、その時代の習慣に則（のっと）って、語られていることです。

パウロが意味していることは、その時代の習慣や常識から考えて恥になるような外見は避けようということです。クリスチャンは律法的な生き方はしませんが、自分勝手にいいとうわけではなく、「神の栄光を表す」という喜びの動機があるからです。

またパウロは、「男のかしらはキリストであり、女のかしらは男であり、キリストのかしらは神」とも言っています。男性は女性よりも優位にあるように見えても、結局かしらはキリストであり神なのです。「男性には負けない」「女性には負けたくない」などと対抗心を持つのは意味がありません。要は神に従うことです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



11:17 ところで、聞いていただくことがあります。私はあなたがたをほめません。あなたがたの集まりが益にならないで、かえって害になっているからです。

11:18 まず第一に、あなたがたが教会の集まりをするとき、あなたがたの間には分裂があると聞いています。ある程度は、それを信じます。

11:19 というのは、あなたがたの中でほんとうの信者が明らかにされるためには、分派が起るのもやむをえないからです。

11:20 しかし、そういうわけで、あなたがたはいっしょに集まっても、それは主の晩餐を食べるためではありません。

11:21 食事のとき、めいめい我先にと自分の食事を済ませるので、空腹な者もおれば、酔っている者もあるというしまつです。

11:22 飲食のためなら、自分の家があるでしょう。それとも、あなたがたは、神の教会を軽んじ、貧しい人々をはずかしめたいのですか。私はあなたがたに何と言ったらよいでしょう。ほめるべきでしょうか。このことに関しては、ほめるわけにはいきません。

11:23 私は主から受けたことを、あなたがたに伝えたのです。すなわち、主イエスは、渡される夜、パンを取り、

11:24 感謝をささげて後、それを裂き、こう言われました。「これはあなたがたのための、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行ないなさい。」

11:25 夕食の後、杯をも同じようにして言われました。「この杯は、わたしの血による新しい契約です。これを飲むたびに、わたしを覚えて、これを行ないなさい。」

11:26 ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです。

教会の混乱の第二番目は分裂と、それをもたらすような主の晩餐についてです。

分裂も「やむをえない」場合があるとパウロは言います。「本当の信者が明らかにされるため」です。間違った神観、聖書観、教会観などを持ち続ける人は、教会の交わりからは去って行くのも「やむをえない」ということです。ただしパウロは冷たい心でこれを書いているのではなく、「涙をもって」と他の箇所でも書いているように、大きな痛みを伴ったことです。

パウロが最も問題にするのは上述のことではなく、主の晩餐が害になっていてそれで「分裂があると聞いて」いるからです。主の晩餐とはイエス様の最後を思いながら、その救いにあずかった者たちが心を1つにして、感謝し信仰を新たにしているものです。しかし、そうではなく「害になっている」というのです。

その原因は豊かな者は自分の食べ物を楽しんで、貧しい者に分け与えもせずにいるということです。それで貧しい人々は恥ずかしい思いをしていたのです。主の晩餐（または聖餐）はイエス様を覚えるためのものですから、そこには愛がなければなりません。ならば主にある交わりも同じで、互いのための思いやりが大切です。

教会には様々な面で乏しい人、悲しんでいる人、弱っている人などが集っています。思いやることに「これで十分」ということはないでしょう。主を覚えるためにも、分かち合い支え合いましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



11:27 したがって、もし、ふさわしくないままにパンを食べ、主の杯を飲む者があれば、主のからだに血に対して罪を犯すことになります。

11:28 ですから、ひとりひとりが自分を吟味して、そのうえでパンを食べ、杯を飲みなさい。

11:29 みからだをわきまえないで、飲み食いするならば、その飲み食いが自分をさばくことになります。

11:30 そのために、あなたがたの中に、弱い者や病人が多くなり、死んだ者が大ぜいいます。

11:31 しかし、もし私たちが自分をさばくなら、さばかれることはありません。

11:32 しかし、私たちがさばかれるのは、主によって懲らしめられるのであって、それは、私たちが、この世とともに罪に定められることのないためです。

11:33 ですから、兄弟たち。食事に集まるときは、互いに待ち合わせなさい。

11:34 空腹な人は家で食べなさい。それは、あなたがたが集まることによって、さばきを受けることにならないためです。その他のことについては、私が行ったときに決めましょう。

主の晩餐から話題は聖餐に移ったような印象を受けますが、元来初代教会では主の十字架を覚える「聖餐」は、食事と一緒に行われたようです。それ

ほど教会では交わりにおいて食事が大切にされてきたのです。ユダヤの伝統でも、食事を共にするのは家族であり、また同じものを食べることによって同じ身体が作られると思われていたのです。

それでパウロは「自分を吟味して、そのうえでパンを食べ、杯を飲みなさい」と言っています。これはあきらかに聖餐のことです。「みからだをわきまえないで、飲み食いする」とは一義的には、自分勝手に食事をするのですが、「みからだ」とありますから、十字架にかかられたイエス様のみからだであり、その救いの確かさと愛の限りなさ、そしてみこころの厳かさということでしょう。

そのような主のみからだの意味、すなわち十字架の意味をわきまえないで勝手に「飲み食いするならば」、主のさばきを自ら招く結果になるというのがパウロの教えるところであり、戒めとしてコリントの教会の実例が挙げられています。ただしここにあるような「さばき」も、クリスチャンに対しては、永遠の滅びではありません。「世とともに罪に定められることのないため」とありますから、悔い改めて「わきまえる」者となるためです。

それにしても私たちは、主からさばかれる前に「自分をさばく」ようでありたいと思います。すなわち、主の聖餐において十字架のイエス様のみからだをわきまえているか、聖餐に関連して食事などの交わりにおいて自分勝手ではないかどうかをよく吟味して、みこころを知って従うということです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



12:1 さて、兄弟たち。御霊の賜物についてですが、私はあなたがたに、ぜひのことを知っていただきたいのです。

12:2 ご承知のように、あなたがたが異教徒であったときには、どう導かれたとしても、引かれて行った所は、ものを言わない偶像の所でした。

12:3 ですから、私は、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも、「イエスはのろわれよ。」と言わず、また、聖霊によるのでなければ、だれも、「イエスは主です。」と言うことはできません。

12:4 さて、御霊の賜物にはいろいろの種類がありますが、御霊は同じ御霊です。

12:5 奉仕にはいろいろの種類がありますが、主は同じ主です。

12:6 働きにはいろいろの種類がありますが、神はすべての人の中ですべての働きをなさる同じ神です。

12:7 しかし、みな益となるために、おののに御霊の現われが与えられているのです。

12:8 ある人には御霊によって知恵のことばが与えられ、ほかの人には同じ御霊にかなう知識のことばが与えられ、

12:9 またある人には同じ御霊による信仰が与えられ、ある人には同一の御霊によって、いやしの賜物が与えられ、

12:10 ある人には奇蹟を行なう力、ある人には預言、ある人には霊を見分ける力、ある人

には異言、ある人には異言を解き明かす力が与えられています。

12:11 しかし、同一の御霊がこれらすべてのことをなさるのであって、みこころのままに、おののにそれぞれの賜物を分け与えてくださるのです。

次にパウロは御霊の賜物について教えます。これはすばらしいものですが、残念なことにその賜物の違いによって分裂・分派が起きることがあるのです。そうならないようにパウロは賜物は違ってもみな同じ聖霊から与えられるのだから1つなのだとして強調します。

まずクリスチャンはみな聖霊の促しによって救われた聖霊の宮であることが大前提として述べられています。聖霊によるのでなければ、だれも、「イエスは主です。」言うことはできないからです。ですから同じ御霊によって賜物が与えられているので、分裂・分派が起こってはならないです。

ここでは賜物のほかに、奉仕と働きも同じように主からのものと書かれています。原語では賜物は「カリスマ」で、恵として与えられる能力です。奉仕は原語では「ディアコニア」で、その人に任せられた係りや職務などを表します。働きは原語では「エネルゲイア」で、力を発揮して主の栄光を表すようなものを表します。これらは3つに分類するというのではなく、どんな人のどんなわざもこれら3つの側面があると考えるべきでしょう。分離できるものではありません。

大切なことはどれも主から与えられているということです。ですから自分の賜物、奉仕、働きがすばらしいからと言って誇ることもいけませんし、こちらの方が優れていると言ってもそれは間違いなのです。

それはクリスチャン同士でも、グループ同士でも、教会・教団・教派間でも言えることです。自

分とは違う賜物を持つ人（たち）を、主が与えられたことのゆえに感謝しましょう。また自分の賜物を主のゆえに感謝し、その賜物を大いに生かしてゆきましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



12:12 ですから、ちょうど、からだの一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分はたとい多くあっても、その全部が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。

12:13 なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。

12:14 確かに、からだはただ一つの器官ではなく、多くの器官から成っています。

12:15 たとい、足が、「私は手ではないから、からだに属さない。」と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。

12:16 たとい、耳が、「私は目ではないから、からだに属さない。」と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。

12:17 もし、からだ全体が目であつたら、どこで聞くのでしょうか。もし、からだ全体が聞くところであつたら、どこでかぐのでしょうか。

12:18 しかしこのとおり、神はみこころに従って、からだの中にそれぞれの器官を備えてくださったのです。

12:19 もし、全部がただ一つの器官であつたら、からだはいったいどこにあるのでしょうか。

12:20 しかしこういうわけで、器官は多くありますが、からだは一つなのです。

12:21 そこで、目が手に向かって、「私はあなたを必要としない。」と言うことはできないし、頭が足に向かって、「私はあなたを必要としない。」言うこともできません。

パウロがまだ救われる前にクリスチャンを迫害していたとき、イエス様が天から「どうしてわたしを迫害するのか」と、パウロに語りかけました。それでパウロは「教会とはイエス様そのものなのだ」と知ったと思われます。教会とはクリスチャンの共同体であり、イエス様が命をかけて滅びから救い、そして代価を払って買い取った（贖った）イエス様のものです。教会が苦しむことは主イエスご自身が苦しむことで、教会の栄光はイエスご自身の栄光です。

まさに教会はイエス様のからだなのです。体であるということから教会のあるべき姿が明確になります。第一には、教会は「一つ」です。別の方向に進むことはできません。また一部が痛めば全体も痛みます。全体の健康がなければ部分の健康もないのです。それが教会です。

第二には、クリスチャンは「器官」です。それぞれが機能・働きを持っているのです。それを果たさなくてはなりません。器官ですから皆がなくてはならない存在です。また器官であってそれぞれに機能がありますから、互いに違いがあります。

以上から多くの規範を学ぶことができます。クリスチャンはキリストを中心に一致すべきです。クリスチャンは他の兄弟姉妹の痛みも喜びも共感すべきです。クリスチャンは教会全体の健全さを求める必要があります。クリスチャンは教会において自分の機能や働きを知って、その使命を果たし貢献する必要があります。クリスチャンは自分が器官なので、教会にとってかけがえのない大切な存在であることを自覚する必要があります。そして他のクリスチャンも大切な存在であり、自分にはない機能を持っていることを知って、感謝する必要があります。クリスチャンは他の人が

分と違う考え・感じ方・結論・行動パターンを持っていることを肯定的に受け止める練習が必要です。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



12:22 それどころか、からだの中で比較的
に弱いと見られる器官が、かえってなくては
ならないものなのです。

12:23 また、私たちは、からだの中で比較的
に尊くないとみなす器官を、ことさらに尊び
ます。こうして、私たちの見ばえのしない器
官は、ことさらに良いかっこうになります。

12:24 かっこうの良い器官にはその必要があ
りません。しかし神は、劣ったところをこ
とさらに尊んで、からだをこのように調和さ
せてくださったのです。

12:25 それは、からだの中に分裂がなく、各
部分が互いにいたわり合うためです。

12:26 もし一つの部分が苦しめば、すべての
部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ば
れれば、すべての部分がともに喜ぶのです。

12:27 あなたがたはキリストのからだであ
って、ひとりひとり各器官なのです。

12:28 そして、神は教会の中で人々を次の
ように任命されました。すなわち、第一に使
徒、次に預言者、次に教師、それから奇蹟を
行なう者、それからいやしの賜物を持つ者、
助ける者、治める者、異言を語る者などです。

12:29 みなが使徒でしょうか。みなが預言者
でしょうか。みなが教師でしょうか。みな
が奇蹟を行なう者でしょうか。

12:30 みながいやしの賜物を持っているで
しょうか。みなが異言を語るのでしょうか。み
なが解き明かしをするのでしょうか。

12:31 あなたがたは、よりすぐれた賜物を熱
心に求めなさい。また私は、さらにまさる
道を示してあげましょう。

脳、心臓、脊髄などは少しの損傷で大きなダ
メージとなる弱い部分ですが、それは体にとって
非常に大切だからです。キリストの体である教会
も同じで、弱いと見える人やグループが重要な場
合があるということです。

また「尊びます」とは覆いをかけるという意味
がありますから、衣服などで覆うという意味にも
解釈できます。それは「調和」のため、「いたわ
り合うためです」とあります。

教会は「苦しみ」など思いを共有するところ
です。それはせめて一週間ごとの交わりがなければ
有り得ないことでしょう。また「すべての部分」
とありますから、自分の気に入った人のことだけ
を気にかけていれば「いたわっている」というこ
とではなく、教会全体を思って祈り、支えること
が大事です。

次にパウロは、私たちが各器官であるというこ
とから、教会の働きへの任命について説明してい
ます。使徒、預言者、教師は人に教える働きです。
奇蹟やいやしの賜物を持つ人は祈る働きです。助
ける者、治める者は教会の運営面で奉仕をする人
でしょう。異言を語る者が最後にありますが、こ
れについては注意を要するので、パウロは後にそ
の説明をしています。

ここで大切なのは、「みなが…でしょうか。」
という点です。それぞれの賜物が違っていい
のです。「あの人にはこの賜物があるからすぐれ
ている」「この人には与えられていないから劣っ
ている」と考えるのは間違いなのです。個人も教
会も主の主権によって与えられた賜物を感謝して、
主のために精一杯用いるべきなのです。もしも
「自分だけが賜物を与えられた」と思うなら、誰
よりもへりくだって、その賜物を他の人のために

用いなければなりません。

そしてパウロは愛という賜物に関しては、
これよりも「すぐれ」としていると明言してい
ます。誰もが持つべき賜物だからです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の
約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願
いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのど
の部分の主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

